

論 説

資本制的私的所有解明における マルクスの1840年代到達点 ——唯物論的社会・歴史観からの把握と 経済学的解明との両面において——（上）

西 野 勉

〔序〕 本稿の課題

〔一〕 唯物論的社会・歴史観の確立と資本制的私的所有の歴史性把握

（一）資本制的私的所有の歴史性把握の原像

——「私的所有は、生産力の一定の発展段階にとっての必然的な交通形態」であるという視座について——

（二）資本制的私的所有止揚の必然性の原像——資本制的私的所有の経済学的解明の必要

（以上本号）

（以下次号）

〔二〕 資本制的私的所有の経済学的解明における1840年代到達点

（一）『経・哲草稿』段階において解こうとした基本問題

（二）資本制的私的所有の経済学的解明におけるブルードン所有論批判の意義

（三）資本制的私的所有の経済学的解明における『賃労働と資本』および『共産党宣言』の役割のちがひ

〔序〕 本稿の課題

わたくしは、最近の論稿¹⁾において、『資本論』における資本制的私的所有

の本質把握とその論理的再構成の方法とを念頭におきつつ、「パリ時代」のマルクスに関しての近年のめざましい研究成果を吸収することによって、『経済学・哲学草稿』（以下『経・哲草稿』と略記する）から『資本論』へ太く貫いてゆく中核的な思想的・理論的要素を確認する仕事をおこなった。

本稿は、それを直接ふまえた上で、『経・哲草稿』から『ドイツ・イデオロギー』『哲学の貧困』を経て『共産党宣言』『賃労働と資本』へ至る1840年代マルクスの資本制的私的所有解明の基本線をとらえかえし、その到達点を明確にしておこうとするものである。

周知のとおり、マルクスによる資本制的私的所有の経済学的解明は、40年代半ば頃までに形成・確立された唯物論的社会・歴史観を「導きの糸」としてなされた。^{*}

^{*}マルクス自身が『経済学批判』『序言』において定式化しているその唯物論的社会・歴史観が、1840年代の半ば頃までに形成・確立されたものであることは、マルクス自身がその「序言」でべているところであるが、その点に関して、最近の研究成果は、『経・哲草稿』段階においてその「形成」を、『ドイツ・イデオロギー』段階においてその「確立」を確認してきている²⁾。

しかし、40年代半ば頃までに形成・確立してきた唯物論的社会・歴史観と経済学研究との間の「導きの糸」がどういう内的関連をあらわすものであったかの納得的な研究は、いわばまだはじまったばかりのように思われる。

本稿は、その面での前進をはかることをひとつの重要な課題としつつ、資本制的私的所有の解明というマルクス終生の課題に対して、それにふみ込みはじめた40年代マルクスがそれにどのような光をあて、どのような視座をつくりあげていったか、そしてその経済学的解明がどれほどの到達をはたしたかを整理・確認しようとするものである。

その場合、基本的観点は、『資本論』へむかっただけの発展を見極めることにおいているが、ここでは、その基本的観点に立った上での必要な手続きとして、50年代つまり『経済学批判要綱』段階にむかって、どのように前進し、何を課題として残したかを見極めておくことを直接の課題とする。

〔一〕唯物論的社会・歴史観の確立と資本制的私的所有の歴史性把握

唯物論的社会・歴史観の形成・確立を画する『経・哲草稿』『ドイツ・イデオロギー』において、マルクスは、資本制的私的所有にどのような光をあて、それをどのようにとらえようとしたか。そして、それは経済学上どのような課題を自らに課することになったか。*

*『ドイツ・イデオロギー』は、マルクスとエンゲルスが当時のドイツ的イデオロギー——とくに、フォイエルバッハ、バウアー、シュティルナーのそれ——に対して、相互の見解をつきあわせ、くいちがいを調整しつつ、批判の共通点をまとめあげていている草稿であるから、執筆順序や誰の執筆部分かの識別ぬきに都合のよい部分的読みとりはさけなければならない。その点を考慮して、本稿では、パガトーリアの執筆順序考察³⁾と広松渉氏による第1巻第1篇の新編集本によりその執筆順序・執筆分担を識別し、とくに両者をふまえた細谷昂氏の研究⁴⁾をよりどころとして『ドイツ・イデオロギー』を読みとっている。

以下、その引用などに際しては、第1巻第1篇については、広松渉氏の新編集本、K. Marx/F. Engels, Die deutsche Ideologie, hrsg. von Wataru Hiromatsu, Kawadeshoboshinsha Verlag, 1974. により、そのページを示し、それ以外は、K. Marx-F. Engels Werke, Band 3, Institute für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1958. により、そのページを示す。

(一) 資本制的私的所有の歴史性把握の原像

——「私的所有は、生産力の一定の発展段階にとっての必然的な交通形態 (Verkehrsform)」(MEW, Bd. 3, s. 338.) であるという視座について——

すでにみたように、『経・哲草稿』は、資本制的私的所有を、自己産出的な発展をとげてゆく「人間的(の)本質」つまり人間の生命活動の意識性と共同的存在性との特殊歴史的な(=「疎外された」)実現形態ととらえる視座を開示していた。⁵⁾

この『経・哲草稿』で開示された視座が内容上の一定の整理・発展をともないつつ経験科学的表現で言い直されたもの、それがこの『ドイツ・イデオロギー』における「私的所有は、生産力の一定の発展段階にとって必然的な交通形態」であるという視座であること、この点を何よりもまず確認しておかなければならないであろう。

この間の関連を見定めておきたい。

(a) 第一に見定めておかなければならないことは、『ドイツ・イデオロギー』以降、〈生産力の発展〉という概念で表わされることになることがらの本質的内容は、『経・哲草稿』において、〈「人間的（の）本質」の発展〉あるいは〈「人間的（の）本質諸力」の発展〉という概念でとらえられていたものにならないということである。

(i) 『経・哲草稿』は、歴史を「人間的（の）本質（*menschliches Wesen*）」の自己産出的発展過程ととらえ⁶⁾、その「人間的（の）本質」を何よりもまず〈意識的な生命（生活）活動〉としての〈自然の意識的加工・享受〉という「生産的生活（*produktives Leben*）」（*MEGA, I / 2, s. 240*）においてとらえていた。そして、そこから「産業の歴史とその達成された対象的現存」とが「人間的（の）本質的諸力（*menschliche Wesenkräfte*）の開かれた書物」（*ibid., s. 270.*）であるという見地を開示していた。

ここで「人間的（の）本質」あるいは「人間的（の）本質的諸力」としてとらえられている〈意識的な生命（生活）活動〉としての〈自然の加工・享受〉の発展つまり「生産的生活」の発展ということが、その意味内容からして〈生産力の発展〉を意味することは、容易に了解されることであろう。〈産業の発展〉ということが〈生産力の発展〉とほぼ同義であることは、それ以上にいうまでもないことである。

このように、まず何よりも第一に、『ドイツ・イデオロギー』以降、歴史の窮極的動因として位置づけられることになる〈生産力の発展〉の原意が、『経・哲草稿』において「人間的（の）本質」あるいは「人間的（の）本質的諸力」の発展としてとらえられていたものであったことを確認しておかなければならないように思われる。

「人間的（の）本質」・「人間的（の）本質的諸力」の発展を歴史貫通的な、自己産出的歴史創造力ととらえたこと、この視座の経験科学的表現への発展、それが〈生産力の発展〉を歴史の発展の窮極的・独立変数的動因とする視座の原像なのである。

付言しておけば、ヘーゲルが世界史の窮極的動因を〈世界精神〉なるものの

自己開示に求めていたのに対し、マルクスは、『経・哲草稿』においてその観念的「さか立ち」を転換させて、社会・歴史の窮極的動因をまさに〈人間の意識的生命活動〉の発展そのものに、つまり「人間的（の）本質」あるいは「人間的（の）本質諸力」の発展そのものにおきかえたのであったが、歴史の規定的推進力を〈生産力の発展〉にもとめる視座は、ここにおいて獲得されたものといってよいのである。「世界史全体は、人間的（の）労働による人間の産出」（MEGA, I / 2, s. 274.）にはかならないととらえた視座に、そのことは集約的に表現されていたといってよいであろう*。

*以上のような意味において、トーフシェラーによるこの間の次のような関連把握は、きわめて納得的である。

トーフシェラーは、『経・哲草稿』の疎外論が「本質的に社会発展の理論である」ことを論じて、そのなかで、マルクスが人間の歴史を「人間の本質的諸力の対象化として、『たとえ疎外された姿においてであれ、産業を通じて生成する』自然として、把握している」ことを指摘した後、

「この『人間のために』生成する自然は、人間の『本質的諸力』の対象化として、人間の生産活動の発展の表現であり、同時に、歴史における人間の自己産出過程の指示器であり鏡像である。だから、マルクスにとって、『産業の歴史と産業のすでに生成した対象的現存とは人間の本質的諸力の開かれた書物』であり——マルクスの用いた表現によれば——『人間の本質的諸力の公開的な展示』なのである。

このことはマルクスが産業の発展水準を、生産の様式、人間による自然支配の度合とそのときどきに達成されている『人間の本質的諸力』の発展水準、したがってなかんづく、マルクスが少しのちに『生産諸力』という専門用語で表現したものについて知らせてくれ、また人間がその物質的生活の生産においてとりむすぶ社会的関係を決定的に基礎づける客観的な計測器と見なしている、ということを示している。」⁷⁾という把握を示している。

「人間の本質的諸力」→「生産諸力」という関連が正しくとらわれていることに留意されたい。

(ii) 〈生産力の発展〉を歴史の窮極的動因ととらえる視座の原像が、このようなものであったがゆえに、マルクスにあっては、『ドイツ・イデオロギー』以降においても〈生産力の発展〉という概念は、〈人間の発展〉〈諸個人の発展〉ということの中核にすえた概念でありつづけるのである。当面の主題に関

してこの点を簡単に確認しておくことにしたい。

④『ドイツ・イデオロギー』において；後にややくわしくとりあげるが、第1篇第1ブロックにおけるエンゲルスの共産主義像に関してマルクスが註記した「生産力の普遍的発展にともなうのみ普遍的交通が確立され」、それによつてのみ「普遍的な諸個人が確立される」のだという指摘、(Marx/Engels, op. cit., hrsg. von Wataru Hiromatsn, s. 37.) また、第1篇第3ブロックにおける「交通形態」が「生産力の発展」に照応することを述べる文脈のなかでの、「交通形態」が個人の「自己活動の諸条件」をなすが、その「諸条件の歴史」は、「生産力の歴史であり、従つてまた諸個人そのものの諸力の発展の歴史でもある(傍点は筆者)」(ibid., s. 138.) というとらえ方など、その他<生産力の発展>と<人間の発展><諸個人の発展>とを相即的にとらえていくことの証左は、枚挙にいとまがないほどある。

*中川弘氏が唯物論的歴史観の形成・確立を精確に考察された前出の力作「唯物史観の確立」(服部文男篇『講座 史的唯物論と現代2』所収)において、『ドイツ・イデオロギー』における唯物論的歴史観の確立の意味を析出されるなかで、そこにある複数の史論の共通の前提になっている歴史の根本的な起動力・推進的契機がどのようにとらえられているかを考察されて、それが「諸個人そのものの発展」=「生産諸力の発展」ととらえられていること、すなわち「『生産諸力の発展』とは、本質的には『諸個人そのものの諸力の発展』として、すなわち『自然的基礎』の『変様』の度合い、『自然的基礎』にたいする人間の関係行為の、いわば広がりや深まりを意味するものとして捉えられ、したがつてまたその発展の契機は、『自然的基礎』にたいする人間の関係行為そのもののうちに包蔵されていること、すなわち人間に固有の類的活動そのもののうちに、『生産諸力の発展』を必然ならしめ、かくして歴史の発展を必然ならしめる根本的契機が存する、と理解されているように思われる」(62ページ)と整理されている点、適確な考察であろう。参照されたい。

⑤『哲学の貧困』において；たとえば、生産関係の歴史性をのべる文脈のなかで、「生産様式が、そのなかで生産諸力が発展する諸関係が永久的な法則でなく、人間および人間の生産力の一定の発展に照応するものであること(傍点は筆者)」(MEW., Bd. 4, s. 140.) とのべ、<人間の発展>と<生産力の

発展>とを同列的・同義的にあつていることをみよ。

②『経済学批判要綱』において；貨幣章における人間の相互依存の形態基準による人類史の「三段階」認識が、まさに、<生産力の普遍的発展>→<人間の普遍的関連>→<諸個人の普遍的発展>を三身一体として展望したものであることを先ず想起しておこう。また、「固定資本」を論じているところで、「固定資本」の発展が資本としての資本の発展の物質的基礎になること、また、「固定資本」=機械装置の発展によって人間が生産過程の「監視者」「規制者」になることを論じ、そのことは「社会的個人 (gesellschaftliches Individuum) の発展」を促すこと (MEGA, II / 1. 2, ss. 581~2.)、そして、「生産力と社会的関連——社会的個人の発展の異った二つの側面——は 資本にとってはたんに手段にすぎない」が、しかし、それらは、資本制的諸関係を「爆破するための物質的諸条件なのである」ことを論じているところ (ibid., s. 582.) などは、まさに<生産力の発展>と<社会的関連の発展>とが「社会的個人の発展の二つの側面」としてとらえていることを明白に示している。

ここにいう<生産力の発展>が、対自然における人間の意識的関係行為<加工・享受>の発展のことであり、<社会的関連の発展>が、その場合の対人間相互の社会的協働関係の発展のことであることを考えるとき、ここ『要綱』において、資本制のもとでは資本の運動の「手段」となっていながら、その発展が資本制的諸関係を「爆破する物質的条件」となるとらえられている「社会的個人の発展の二つの側面」とは、まさに、『経・哲草稿』において、「私的所有」のもとで「疎外」されていながら、「疎外」克服の条件ととらえられていた「人間的 (の) 本質」の発展あるいは「人間的 (の) 本質諸力」の発展としての人間の生命活動の二つの側面の発展、つまりその<意識性>と<共同的・社会的存在性>の発展に他ならないこと、このことが了解されるであろう。

まさに、マルクスにあっては、生産力の発展が社会・歴史の発展の基底的推進力であるという視座は、「人間的 (の) 本質」・「人間的 (の) 本質諸力」の発展を歴史創造力とらえた視座に直接に胚胎しており、だからこそ人間の発展・諸個人の発展が社会・歴史の発展の原動力であるという視座をその中核に内蔵した視座でありつづけるのである。

このことを深くとらえかえしておくことが重要であるように思われる⁸⁾。

(b)第二に見定めておかなければならないことは、以上見たように〈生産力〉という概念用語が、『経・哲草稿』において「人間的(の)本質」として抽出・把握された〈人間の生命活動の意識性〉にかかわる側面の経験科学的概念用語への発展であるとすれば、『ドイツ・イデオロギー』以降「交通形態」→「生産関係」という概念用語で表わされることになるものは、同じく「人間的(の)本質」として抽出・把握された〈人間の共同的存在性〉の歴史的形態にかかわる側面のより経験科学的内容をふまえた概念への発展だということである。

すでに、『経・哲草稿』において、マルクスは、対自然の関係における〈人間の生命活動の意識性〉の発展と、その生命活動の定在の仕方・現存の仕方としての対人間の〈共同的存在性〉=〈社会的存在性〉の発展とは相即的關係にあるという視座を開示していた⁹⁾。そして、「私的所有」とは、この人間の生命活動の意識性と共同的存在性との特定の歴史的発展段階における必然的な疎外態であるという視座を開示していた¹⁰⁾。

『ドイツ・イデオロギー』は、こうした視座を経験科学的な歴史認識の深化にもとづいてより発展させ、次のような歴史認識の基軸的視座開示と相即的に「私的所有は、生産力の一定の発展段階にとっての必然的な交通形態である」(前出)という視座をまとめあげてゆくのである。

(i) 『ドイツ・イデオロギー』は、『経・哲草稿』における人間の生命活動の意識性と共同的存在性との相即的發展関係視座を継承発展させ、対自然への人間の意識的關係行為の発展度つまり生産力の発展度が、対人間相互間の社会的関連つまり「社会的交通」の発展度を基本的に制約するという基本的制約関係と後者の特定の歴史的形態=「交通形態」が逆に前者を規定しかえすという逆の制約関係を把握する視座にまとめあげ、それを人類史を見据える基軸的視座として確立するのである。

この点を『ドイツ・イデオロギー』自体にそくして確認しておきたい。

第1巻第1篇清書稿において、人間史の根本前提を論じているところで、「生の生産ということは、労働における本人自身のそれにせよ生殖における他人の生の生産にせよ、その都度すでに直ちに二重の関係として——つまり、一

面では自然的関係として、他面では社会的関係として——現われる」というまとめをおこなって、対自然関係と対人間相互関係との相即的「二重性」をとらえる視座の歴史認識視座としての重要性をうち出すと同時に、「社会的」というのは「複数の諸個人の協働」のことであり、この「協働の様式」それ自体が生産力の一面をなすのであること、そして、「人々が手にしうる生産諸力の大きさが社会状態を制約する」のであるから「人類の歴史」は、つねに産業と交換の歴史との連関で研究され論述されねばならない」（以上 *op. cit.*, hrsg. von Wataru Hiromatsu, s. 24, 26.）という視座を強調する。

つづいて、同じ流れのなかで、歴史の端初における自然や社会についての人間の未だ動物的な（未発達な）意識＝「自然と人間との同一性」は、まさに「自然に対する人間の局限されたかかわり合いが人間相互間の局限された関わり合いを制約し、そして人間相互の間の局限されたかかわり合いが自然に対する彼らの局限された関係を制約する」（*ibid.*, s. 28.）からに他ならないからであることをマルクスは指摘し¹¹⁾、対自然関係と対人間相互間関係との相即的・相互制約的發展関係をくり返し強調するのである。

そして、この視座が、第一篇第一ブロックにおけるエンゲルスの共産主義像——「資本主義をふまえてはじめて必然的なものとしてでなく、自然生的分業にもとづく社会の欠陥のうらがえしとしての理想像」¹²⁾——に対するマルクスの長い欄外註記の視座、つまり近代ブルジョア社会が「無産者」と「人間の世界史的定在」とを「生産力の高度の発展」によって生み出すこと、このことがその「疎外の止揚」の力であること、さらにいえば「生産力の普遍的発展にともなうのみ、普遍的交通が確立される」のであり、それによって「局地的な諸個人にかわって世界史的な経験的な普遍的な諸個人が確立される」のであって、そのことなしには共産主義は「地方的」でしかありえず、「世界史的」になりえないのだという視座（*ibid.*, ss. 37, 39.）に深く重なっていること、また、その長い欄外註記の直後の「従来のあらゆる歴史諸段階に〔その都度〕現前した、生産諸力によって制約され、生産諸力を制約しかえすところの交通形態、それが市民社会である」（*ibid.*, s. 38.）という「生産力」と「交通形態」との対応関係において「市民社会」をとらえる総括的視座に深く重なり合っ

ていること、このことを考えるとき、自然に対する人間の意識的なかかわりの発展度＝生産力の発展度が、対人間相互間のかかわり＝社会的交通の発展度を基本的に制約し、後者の特定の歴史的形態＝「交通形態」が逆に前者を規定しかえずという関連において社会・歴史をとらえる視座が、マルクスの歴史認識のきわめて根本的視座として確立されたさまがはっきりとうかびあがってくるのである。

この視座が『経・哲草稿』における対自然における意識的生命活動という「人間的（の）本質」とその際の人間の共同的・社会的存在性という「人間的（の）本質」との相即的・相互制約的發展関係把握の視座からの直接的発展であること、また、その場合、〈共同的・社会的存在性〉は〈社会的交通〉という表現に発展していること¹³⁾、そして、その〈社会的交通〉を歴史貫通的な対自然への意識的關係行為の側面から、つまり自然の意識的な加工・享受における協働という側面からとらえれば、それ自体が生産力であり、そして、それを特殊歴史的な対人間相互間の関係という側面からとらえた場合が「交通形態」であること¹⁴⁾、こうしたことをそのなかから読みとることは、すでに容易なことであるように思われる¹⁵⁾。

(ii) 以上のような歴史認識の基軸視座の確立と相即的に第3篇第3ブロックにおける「私的所有は、生産力の一定の発展段階にとっての必然的な交通形態である」「この交通形態は、私的所有が一つの阻止的な桎梏となるような生産力がつくり出されるまでは振りすてられえず、それ以前には、直接的な物質的生活の生産のためになくはすまされないものである。」(MEW, Bd. 3, s. 338.)という私的所有の歴史的必然性と歴史的位づけに関する総括的把握が示されるのであるが、本稿におけるこれまでの整理・確認と重ね合わせるならば、それが、『経・哲草稿』における、「私的所有」とは「人間的（の）本質」の発展過程上の必然的な疎外態、つまり人間の生命活動の意識性と共同的・社会的存在性との特定の歴史的発展段階における必然的な疎外態であるという視座の直接的発展線上にあることは明らかであろう。

その発展の意味は、一般的には、『経・哲草稿』において開示された「産業の歴史とその達成された対象的現存」とが「人間的（の）本質諸力の開かれた

書物」であるという視座に立脚して、「産業の歴史」や社会形態の歴史の研究による経騷科学的知識をさらにふまえたものになっているという点に求められるが、とくに、当面の主題に関して留意しておくべき発展は、先に示したところであるが、『経・哲草稿』において〈共同的・社会的存在性〉として抽出・把握された人間の「生産的生活」における社会的関連を〈社会的交通〉と括った上で、歴史を貫通してゆく〈自然の意識的加工・享受〉における協働という面でのそれを生産力として把握し、特殊歴史的な対人間相互間の関係という面でのそれを「交通形態」として把握している点にあるとあってよいであろう。後者が『哲学の貧困』以降、「生産関係」という概念用語に発展・定着するものであることはいうまでもない。

(iii) 以上のような『経・哲草稿』からの視座の継承・発展の脈絡のもとに確立された私的所有の歴史性に関する総括的把握と相携えて、『ドイツ・イデオロギー』では、次のような私的所有の歴史的必然性やその発展段階についての歴史具体的な認識が開示されていることも確認しておく必要がある。

つまり(i)第1篇第1ブロックのエンゲルス記述による自然的分業による不平等分配に私的所有の発生を求める視座 (op. cit., hrsg. von Wataru Hiromatsu, s. 32.), (ii)第1篇清書稿における分業の発展段階(生産力の発展段階)から所有形態の発展史(部族的→古代共同体の→封建的・身分的)を説明する視座 (ibid., ss. 82, 84, 86.), (iii)第1篇第3ブロックにおける、「生産用具の自然生的限界」から私的所有の必然性をとらえる視座, (ibid., ss. 90, 92.), それに連続する(二)「中世以降の私的所有」を3期に分けてとらえる試み (ibid., ss. 104, 106, 108, 110, 112, 114, 116.) などがそうである。

しかし、それらは、私的所有の歴史的必然性やその発展段階に関するより具体的認識の開示ではあっても、『経・哲草稿』が試みたところの「私的所有」(資本制的私的所有)の存立構造・存立根拠の解明という「私的所有」の経済構造解明の面では、より一層の前進がそこに明白に読みとれるわけではない。

私的所有の解明という点からいえば、『経・哲草稿』段階における「私的所

有) (資本制的私的所有) の存立構造・存立根拠の一定の解明, つまり「労働によって自然を獲得する労働者」にとって「獲得が疎外として現われ, 自己活動が他人のための活動そしてまた他人の活動として, 生命発現 (Lebendigkeit) が生命の犠牲として, 対象の生産が疎遠な力, 疎遠な人のもとへの対象の喪失として現われる」(MEGA, I/2, s. 246.) ような転倒構造の存立根拠としての特殊歴史的な労働=生産のあり方についての一定の解明¹⁶⁾が先行し, それに続く『政治および国民経済学の批判』の出版契約 (1845年1月) 実行のための経済学研究の継続によって獲得された私的所有の経済学的解明への一定の到達点の上に¹⁷⁾, 『ドイツ・イデオロギー』では, 課題の性格上私的所有の歴史的必然性や位置づけに力点がおかれている, というのが実態であったといつてよい。

その経済学的解明は, 『哲学の貧困』以降により発展した姿を見せることになるのである。

(二) 資本制的私的所有止揚の必然性把握の原像

——資本制的私的所有の経済学的解明の必要——

私的所有の歴史性にかんする以上のようなとらえ方の成熟と重なり合いながら, 『ドイツ・イデオロギー』は, 私的所有止揚の必然性を大工業という生産力と私的所有という交通形態との矛盾において把える視座を展開し, 生産力と交通形態との矛盾に歴史上のあつれきの根源を見出す視座を開示する。

第1篇第3ブロックにおいて, 「中世以降の私的所有の第3期」としての大工業段階を論じる箇所, 大工業による競争の普遍化, 資本への自然科学の服属, 自然的諸関係の金銭関係への解消などをスケッチ風に描写した後, 大工業という「この生産諸力にとっては, 私的〔所有〕がまさに桎梏となった」として, その事態を「この生産諸力は, 私的所有のもとでは一面的な発達しかとげず, 大多数のものにとっては破壊力となり, 私的所有の枠内では, 当の生産諸力の相当量が全く使用不能の域におしとどめられる」という事態, および, 大工業が「国民性というものが彼らにあってはすでに廃滅されているような一階級を生み

出し」、その「資本家との関係のみならず労働そのものをたえがたいものにする」ため、「プロレタリアートの階級運動」の発展が不可避となるという事態として描き出す (op. cit., hersg. von Wataru Hiromatsu, ss. 114, 116, 118.)

これが第3篇第3ブロックにおける「われわれは、生産諸力と交通諸形態とが、私的所有の支配のもとでは破壊力となるにいたっており、階級対立がとことんまでおしすすめられているから、現在の諸個人は、私的所有を廃止せざるをえないということを明らかにした。」(MEW, Bd, 3, s. 424.) という総括につながってゆくことはいうまでもない。

「交通諸形態」という術語の使い方に未だ混乱はあるが、要するに、〈生産力の発展と私的所有との矛盾〉が〈生産力の「破壊力」化〉と〈「階級対立」の激化〉をもたらし、それが私所有的の止揚・廃棄を必然化するという把握が定式化されているとあってよいであろう。

しかしながら、その定式化は、決して生産力と資本制的私的所有関係との包摂と矛盾の関係を内的関連においてとらえ、そこから、〈生産力の「破壊力」化〉と〈「階級対立」の激化〉とを経済理論的論理構造において展開するという手続きをふまえたものにはなっていない。むしろ、客観的事態の整理といった次元にとどまっているものであった。

『経・哲草稿』『ミル評註』段階では、資本・賃労働関係の疎外と商品・貨幣関係の疎外とが「私的所有」(資本制的私的所有)における「人間的(の)本質」の疎外の両面として、内連関連把握の稀薄なままとらえられていたこと¹⁸⁾を想起するならば、『ドイツ・イデオロギー』における私的所有止揚・廃棄の必然性把握は、〈生産力と私的所有との矛盾〉という根源から、資本・賃労働関係的疎外認識の面を〈「階級対立」の激化〉認識へと、商品・貨幣関係の疎外認識の面を人間の社会関係の物象化・生産の無政府性認識を媒介にして〈生産力の「破壊力」化〉認識へと、より経験科学的内実をふまえてとらえることにはいるものの、やはり、両者の内的連関はまだとらえられていないものであった。

結局、それは、商品・貨幣関係の疎外と資本・賃労働関係の疎外との有機的連関が、したがって資本制的私的所有を有機的に構成する商品・貨幣関係的私的所有と資本・賃労働関係的(階級的)私的所有との統一連関が把握されて

いなかったことによるとってよいのであって、ここに資本制的私的所有解明上のこの段階におけるなお大きな限界が認められるのである。それは、資本制的私的所有の経済学的解明の問題であるが、それが、『哲学の貧困』『共産党宣言』『賃労働と資本』において、どのように前進することになるか、次の課題である。

- 1) 西野勉「『資本論』からみた『経済学・哲学草稿』の意義——「人間的(の)本質」抽出・把握と資本制的私的所有の「概念的把握」の意義——」(福島大学経済学会『商学論集』第54巻第3号, 1986年3月, 所収)。
- 2) 中川弘「唯物論的歴史観の確立」, 服部文男編集『講座 史的唯物論と現代 2』青木書店, 1977年, 所収, がそうであり, 細谷昂『マルクス社会理論の研究』東京大学出版会, 1979年, も「端初形成」と「定礎」という表現では同じ確認をおこなっている。
- 3) ゲ・ア・パガトウーリャ(坂間真人訳)『『ドイツ・イデオロギー』第一篇の再構成』, 『情況』情況出版, 1974年1月号, 94~5ページ。
- 4) 細谷, 前掲書, 第四章。
- 5) 西野, 前掲論文, とくに87~9ページを参照されたい。
- 6) この点にかんしては, 同上71~3ページを参照されたい。
- 7) ヴォルター・トーフシュラー(宇佐美誠次郎監訳)『初期マルクスの経済理論 資本論前史(上)』民衆社, 1974年, 246ページ, 252ページ。
- 8) 最近, 池上惇氏は、『人間発達史観』(青木書店, 1986年)において, その刊行の意味が「人間発達史観からする唯物史観の再検討」「ある意味では, 唯物史観を人間発達史観のなかに位置づける試み(傍点筆者)」(36ページ)であることをのべられている。
池上氏のいわゆる「人間発達史観」の重要さや当書物全体でなされている問題提起の重要さは大いに認めるところであるが, しかし, マルクスの唯物史観がその原点から一貫して人間の発展ということを根幹にすえた史観なのであることを, 正しく認識しなおすならば, <唯物史観の根幹にすえられていた人間発達史観を再生させ, 人間発達史観を唯物史観のなかに正しく位置づけなおす>ことの重要性を指摘しておきたいと思う。
- 9) 西野, 前掲論文, 71~4ページを参照されたい。
- 10) 同上, 87~8ページを参照されたい。
- 11) 引用部分は, マルクスの執筆になる部分であることが明白になっている箇所である。
- 12) 細谷, 前掲書, 180ページ。

- 13) 「ミル評註」において、すでに〈共同的・社会的存在〉に関して「社会的交通」(geselliger Verkehr——MEW, Bd. 40, S. 451.あるいは, gesellschaftlicher Verkehr——ibid., S. 453.)という用語も使われていたことを想起しておくべきであろう。
- 14) 「交通形態」という用語法とその概念内容が、『ドイツ・イデオロギー』の執筆過程において、マルクスとエンゲルスの間で、ブルジョア社会の特殊歴史的な性格についての了解が達成されてゆくのに対応して成熟したものであること、そして、それは、「これまですべての歴史的諸段階に現存した生産諸力によって規定され、逆に規定しかえす交通形態とは市民社会のことである」(前出)という総括的定式化に結実するように、「生産力」に対応した特殊歴史的な社会関係・社会形態を表わす特有の術語として使われるようになること、等のくわしい整理は、細谷、前掲書、215～23ページを参照されたい。
- 15) このようにみれば、広松渉氏のような、『経・哲草稿』段階から『ドイツ・イデオロギー』への「世界観上の飛躍」とか、前者の「疎外論の発想」の「超克」による後者における唯物史観の視座設定といったとらえ方がいかに正しいとらえ方でないかということが了解されるのであろう。『マルクス主義の成立過程』至誠堂、1968年、『マルクス主義の地平』勁草書房、1969年、『唯物史観の原像』三一書房、1971年、などにおいて展開されている氏の考え方を整理した上で適確な批判を加えたものとして、中川弘「唯物論的歴史観とパリ時代のマルクス」(福島大学『商経論集』第40巻第2号、1971年12月、所収)、同、前掲「唯物論的歴史観の確立」を参照されたい。
- なお、私も「物神性論に関する諸学説」(富塚良三他2名編『資本論体系2商品・貨幣』有斐閣、1984年、所収)において、氏の上記著作から氏の考え方の骨子を整理した上で、問題点を析出しておいた。参照されたい。
- 16) 『経・哲草稿』が資本制的私的所有の存立根拠を「疎外された労働」に求めたことの方法的意義が、その点にあったことについては、西野、前掲『資本論』からみた『経済学・哲学草稿』の意義の〔二〕、80～90ページを参照されたい。
- 17) 『経・哲草稿』の〈第三草稿〉執筆(1844年8月)からレスケとの『政治および国民経済学の批判』出版契約(1845年1月)との期間は、わずか4カ月であるから、『経・哲草稿』の到達点が後者の出版の理論的・思想的根拠になっていることは容易に想像出来るであろう。また、この出版契約の実行のためにその契約以降『ドイツ・イデオロギー』の執筆開始(1845年11月)までにマルクスがとりくんだ経済学研究については、杉原四郎・重田晃一訳『マルクス経済学ノート』(未来社、1981年)の〈訳者解説〉197～206ページがくわしく紹介している。

なお、『政治および国民経済学の批判』と『ドイツ・イデオロギー』との執筆動

機上の関連については、デ・イ・ローゼンベルグ著、副島種典訳『改訳 初期マルクス経済学説の形成』下巻、大月書店、1971年、306～312ページを参照されたい。

- 18) この点の研究については、中川弘『『経済学・哲学草稿』と『ミル評註』』（福島大学『商経論集』第37巻第2号、1968年10月、所収）を参照されたい。